



特集



長崎空港開港40周年

フライト

大村湾から未来へのflight

世界初の海上空港完成に湧く

世界初の本格的な海上空港である「長崎空港」。長崎県の空の玄関口として地元経済の発展に大きく寄与し、これまで多くの人や物の流れを支え続け、今年で40年を迎えます。

長崎空港は大村湾に浮かぶ箕島を埋め立てて誕生しました。左記にあるように、長崎空港の建設が、「狭い日本の今後の空港建設の在り方を方向づけた」といつても過言ではありません。

昭和50年5月1日、新しい空港に一番機が到着すると、お祝いムード一色。テープカットに続き、花束の贈呈、記念植樹などが行われました。一番機で到着された当時の運輸大臣参加のもと、長崎空港開港式を開催。空港沿岸には250隻を超える漁船が船団となって連なり、空港の開港を祝いました。

一方、空港の建設により、先祖代々守ってきた土地・家屋を失った箕島の住人や、漁場を失った漁業関係者のことも忘れてはなりません。皆さんの理解があったからこそ、空港を持つ都市として大村が発展してきたのです。

[開港時の写真]



👉 一番機到着後テープカット

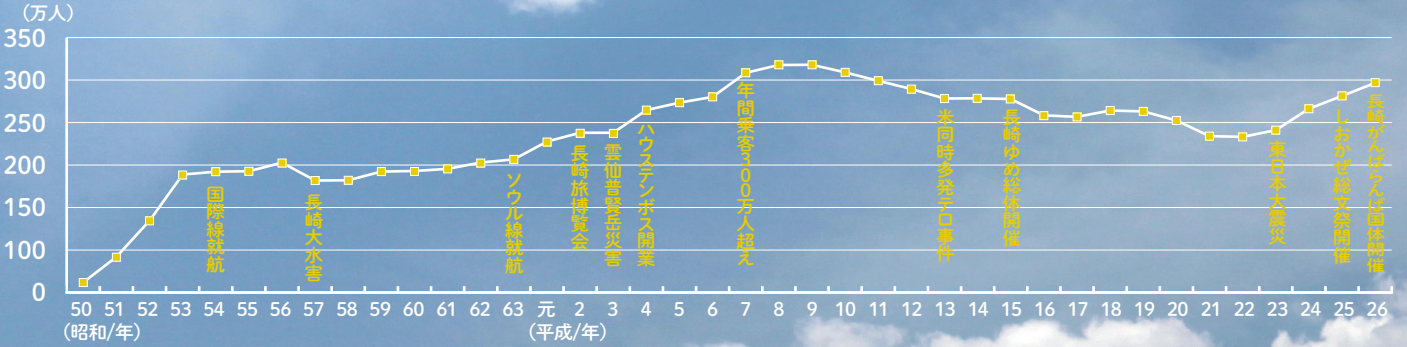


👉 漁船250隻が参加しお祝いのパレード



👉 市民会館に場所を移し祝賀会

[乗降旅客数の推移]



長崎県知事 久保勲

昭和50年5月1日

ここに期待しております。

この空港が長崎県の政治、経済、文化の発展に寄与することはもちろんのこと、近隣諸外国との経済、文化交流のきずなとなることを大いに期待しております。

▼当時の県知事のメッセージ

世界で初めての海上空港として、ここに新空港を開港いたしますことは、長崎県の航空輸送の歴史を大きく書きかえるということどもならず、狭い日本における今後の空港建設の在り方に1つの方向づけをしたという点で大きく評価されるべき出来事と存じます。県民をはじめ、空港建設にご協力いただいた皆さまとともに大きい喜びとするところでございます。

そこには平穏な暮らしがあった

箕島

み しま

空港建設前の箕島の航空写真(提供:ニチレイフーズ)

大村湾に浮かぶ周囲7キロの小島だった箕島。13世帯66人が暮らしていました。昭和46年に調印書に署名し、正式に空港建設が始まりました。

当時の島民で結成された箕島会。毎年、開港日の5月1日に箕島に集まって先代の慰霊祭を行います。当時に思いを馳せています。箕島会の会長を務める大島さんは、「箕島にはたくさんの思い出が詰まっています。今でも夢に出てきます。」と、心境を語ります。

大島さんの父・誠さんは、解散式で島民を代表してあいさつをされたそうです。また、当時の思いを書いたためにおられ、そこには「先祖に対する申し訳ない

気持ち」がつづられていました。

箕島を出た後、大島さんは旧大村空港に就職。新空港に受け継がれ退職するまで、空港の発展を見守ってきました。「箕島は生まれ育ったふるさと。提供した島が見事な空港となったことを誇りに思っています。この廃村のヒストリーを語り継いでいながら、空港の更なる繁栄を期待しています。」と、思いを話してくださいました。



箕島分校閉校式



建設工事中の箕島

故郷を誇りに思う

箕島会会長

大島 弘美さん



「空港秘話」

海軍仲間が生んだアイデア

当時の新聞記事によると、箕島への長崎空港の建設は、市内に住む旧海軍パイロット仲間(池田実雄さん、中溝豊さん)の、それまでの体験とアイデアで実現したそうです。

それまで、旧大村空港への飛行場建設の意見書などを提案していた池田さん。しかし、提案は受け付けられず行き詰まっていた。そこで、大村湾上空をよく飛行していた後輩の中溝さんに相談。「箕島が最適ではないか。」との助言に、「朝夕眺めていた箕島は、空母にそっくりではないか。」と、ぴんときました。すぐ実地調査を行い、埋め立てる土の量まで正確に計算。2週間で建設意見書を作り上げたのです。池田さんの「市の発展に役立てば」との思いが、時代への貴重な布石となりました。



提案した池田実雄さん



↑長崎新聞特集号「大空にはばたく希望の翼」

年号	主なできごと
昭和44年	箕島が予定地と発表
昭和47年	空港建設起工式
昭和49年	箕島大橋が完成
昭和50年	ターミナルビルが完成
昭和50年	長崎空港開港
昭和54年	国際線・上海線就航
昭和55年	滑走路3,000mに延長
昭和63年	長崎・ソウル線開設
平成2年	コンコルド飛来
平成6年	政府専用機飛来
平成7年	空港利用者4千万人突破
平成7年	年間乗客3百万人超え
平成20年	ターミナルビルリニューアル



↑2年間にわたる増改築工事が完成し、リニューアルオープンしました。



↑コンコルドが飛来し、一目見ようと約2万人が訪れ、空港は大混雑。



↑世界初の海上空港が、3年の歳月をかけて華々しく開港。

「最初は、超音速旅客機「コンコルド」の飛来。地方空港への飛来は初めてのことでした。「定期便に影響が出ないかやきもきしましたが、大盛況でビルや花文字山はたくさんの人でした。」と当時を振り返ります。

「昭和52年から同社に勤務する隅田さん。いろいろな部門を経験しながら、長崎空港の発展に貢献してこられました。隅田さんは、特に印象深い出来事が二つあるといいます。

「一つは、ターミナルビルのリニューアル。当時、物販などの現場責任者を任されていた隅田さんは、「約1万点あるアイテムをどのように配置するかギリギリまで悩みました。」と、苦心されたことを思い出すそうです。



「お客さまのことを考え、行動できた。それが糧となつて今の自分があると思っています。」と隅田さん。重責を乗り越えてきた達成感がうかがえました。

もう一つはターミナルビルのリニューアル。当時、物販などの現場責任者を任されていた隅田さんは、「約1万点あるアイテムをどのように配置するかギリギリまで悩みました。」と、苦心されたことを思い出すそうです。

乗り越えた重責

長崎空港ビルディング(株)
旅行部長
隅田 和弘さん



隅田さんは、「定期便に多少影響は出たが、大きな混乱がなくよかった。」と、当時を振り返りました。

コンコルドが飛来した当時、隅田さんは、主に飛行機の安全飛行と定時運行をつかさどる係でした。コンコルドが来たからといって、定期便に影響が出ないよう業務に当たっていました。ところが、予想以上の見物客で周辺は大渋滞。定期便を操縦するはずのパイロットがまだ到着しておらず、無線でパイロットの居場所を捜索すると、「箕島大橋の真ん中で渋滞に巻き込まれている。」とのこと。当時は携帯電話などはない時代。あわてて事務所を飛び出しお迎えに行き、パイロットとともにその荷物をかかえて箕島大橋を走ったそうです。

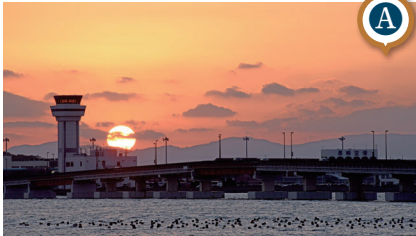
【空港秘話】

箕島大橋を走る！



箕島大橋

昭和49年に開通した箕島大橋。本土と空港を結ぶ長さは970メートルで、ここから眺める朝日や夕日は最高です。橋を渡るとフェリー乗り場もあり、時津町やハウステンボスを結んでいます。



A

管制塔

開港当時は、国内2番目の高さを誇っていた管制塔。空港の入口にそびえ、航空機の航行と離着陸の安全を守るために、国土交通省が管制している航空保安施設です。



B

ターミナルビル

売店は、銘菓・海産物・お酒など、県内最大級の品揃え。レストランには県産品にこだわったメニューも。屋上には送迎デッキがあり、ご家族・ご友人と一緒に楽しめます。



C



私たちのまちの 長崎空港 ✕



D

メガソーラー建設予定

県有地を活用して県内最大規模となるメガソーラーの建設が予定されており、地域経済への波及効果が期待されます。4月2日に起工式が開催され、本格的な工事が始まりました。



E

空港保安防災教育 訓練センター

平成12年に開所。日本唯一の訓練施設で、全国から空港の消防隊員が訪れます。訓練は、あらゆる事故を想定し、実物大の模型に火をつけた消火訓練など、実践しながら。



F

花文字山

「NAGASAKI」の文字が浮かぶ花文字山は空港のシンボル。普段立ち入ることはできませんが、年に2回ほど一般開放されています。



長崎空港開港40周年

長崎空港開港記念祭



とき 5月16日(土)
10:00~15:00

ところ 長崎空港

※公共交通機関をご利用ください。
※詳しくは、長崎空港のホームページをご覧ください。

✕ 主なイベント

- ふわふわアトラクション
- 模擬店・縁日
- お子さまお絵かき
- 空港歴史写真展
- 航空会社歴代制服展示
- お子さま制服試着コーナー
- バルーンアート教室
- ゆるきゃらお菓子プレゼント
- タイムカプセル
- ふれあいミニ動物園
- ガラポン抽選会
- 記念切手販売

✕ 親子機体見学イベント

実施時間: ①10:30~12:00 ②12:00~13:30

③13:30~15:00 ※変更する場合は有

実施場所: 長崎空港内駐機場

対象: 小学校1年生から中学生までの親子
(1家族4人まで)

参加費: 無料

締切: 5月2日(土)(応募者多数の場合抽選)

申込方法

往復はがきに、住所・氏名・年齢・代表者の連絡先・見学希望時間(第2希望まで)を記入し、お申し込みください。結果は返信はがきで通知します。

応募先: 〒856-0816 箕島町593-2
全日本空輸長崎空港所

「選ばれる空港」をめざして

長崎がんばらばらばは国体で盛り上がった平成26年。長崎空港の乗降客は、300万人に達する勢いで、大いににぎわいました。

前出の隅田さんは、「これからは『選ばれる空港』になっていくことが重要だ。」と考えています。「空港に降り立つと、最初に顔を合わせるのが空港の係員。長崎の第一印象がここで決まります。空港に携わるすべての人々でもてなし、近隣の空港に負けない魅力を地域と一緒に作り上げていきたい。」と意気込みを語ります。

5月で40周年を迎える「長崎空港」。全国的に見ても空港を持つ自治体は限られており、大村は長崎空港の開港を契機に大きく飛躍してきました。

今まさに、全国の自治体で「地方創生」に向けたアイデア勝負の取り組みが始まろうとしています。長崎、大村ならではのオンラインワンを創出し、地域の魅力を発信しながら、世界初の海上空港「長崎空港」が、国内のみならず世界へ向けたゲートウェイとして発展していくのも夢ではありません。

